IS〈インフィニット・ストラトス〉宿命を変える奇跡の双騎士

陽炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉宿命を変える奇跡の双騎士

【Ｎコード】

Ｎ３８５６ＢＡ

【作者名】

陽炎

【あらすじ】

ＩＳ（インフィニット・ストラトス）それは女にしか動かせない飛行パワード・スーツ。そのＩＳを男でありながら動かしてしまった少年、織斑一夏。一夏はＩＳ学園で出会った仲間達と共に幾度の危機を乗り越えてきた。だが一夏達の目の前にＩＳを動せるもう一人の少年が現れた。その少年と出会った事で一夏達の宿命と世界が大きく変わる…。

これはＩＳの二次創作小説です。作者は文才が無いに等しいうえに小説を書くのはこれが初めてです。どうか暖かい目で見てください。

プロローグ　（前書き）

作者の初投稿小説です。

今回はプロローグです。

プロローグ

ＩＳ　正式名称（インフィニット・ストラトス）　宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。発表当初は世界はＩＳを認めようとしなかった。だがＩＳ発表から一ヶ月後に起きた『白騎士事件』で世界中にＩＳのスペックの高さが知れ渡った。ＩＳの前では現在の戦闘兵器はただの鉄クズに等しくそれ故に世界の軍事バランスは崩壊した。しかも開発者の篠ノ之束が日本人だったので、日本は独占的にＩＳ技術を保有していた。危機感を募らせた諸外国はＩＳ運用協定『アラスカ条約』によってＩＳの情報開示と共有、研究のための超国家機関設立、軍事利用の禁止等が決められＩＳは『スポーツ』としての利用にと落ち着き所謂パワード・スーツとして世界中がＩＳの開発と操縦者の育成に力を入れる事になったが、ＩＳには致命的な欠陥があった。それは女にしか使えないと言う事だ。ＩＳ操縦者がどれだけ揃っているかで世界の軍事力（正しくは有事の際の防衛力）へと繋がる。そして操縦者は女のみ……となると、どの国も率先して女性優遇制度を施行した。これによって『女＝偉いという構図はあっという間に浸透し、ＩＳ発表からの十年で女尊男卑の社会へと変化した。だが日本で女にしか動かせないＩＳを十五歳の少年が動かし世界初の男でＩＳを動かせる存在が現れた。その少年は唯一ＩＳを動かせる男として日本国が運営管理するＩＳの操縦者育成機関、特殊国立高等学校・ＩＳ学園に入学させられた。この一件で少年の宿命（さだめ）が大きく変わる事になる。

七月八日。二泊三日の臨海学校が終えた国立ＩＳ学園一年生及び教師を乗せたバス四台が学園への帰り道を走行しており、あと数分もすれば学園に到着する。

「すー……すー……」

四台のバスの一台一年一組のバスの中で一人の黒髪の少年が穏やかな寝息をたてながら寝てているこの少年こそ世界で唯一ＩＳを動かせる男にして一組のクラス代表、織斑一夏である。

「…夏、一夏起きて…」

もうすぐ学園に着く為か濃い金髪を首の後ろで束ねた少女が横で寝ている一夏を優しく揺すりながら起こす。この少女の名前はシャルロット・デュノア。フランス代表候補生でありデュノア社の社長の実子である。当初は二人目の男性ＩＳ操縦者、シャルル・デュノアとしてＩＳ学園に転入したがふとした出来事で一夏に正体がばれ学園を去ろうとしたが事情を知った一夏の真摯な説得で学園に残るのを決め、改めて女子として転入した。その一件で自分に居場所を与えてくれた一夏に好意を抱いている。彼女が何故男子のふりをしていた理由は、また別の機会に……

「ん…んぁ……シャル…ロット？」

シャルロットの声で一夏は起きたらしくシャルロットの名前を呟く。

「おはよう一夏。」

「おはようシャルロット、起こしてくれてありがとな。」

一夏はシャルロットに起こしてくれた事に微笑みながら礼を言う。

「い、いいよお礼なんて！」

「ん、そうか？」

『い、言えない。一夏の寝顔を堪能してた何て絶対に言えない！あぁでも一夏の寝顔可愛かったなぁ～。』

シャルロットはさっきまで見ていた一夏の寝顔を思い出して微笑んでいた。

「まったく…おい一夏！しゃっきとしろ、もうすぐ学園に着くぞ！」

一夏に対して黒髪をリボンで縛ってポニーテールにしている少女が少しきつめの口調で話し掛ける。この少女の名前は篠ノ之箒。ＩＳの制作者、篠ノ之束の妹にして一夏とは幼なじみである。一夏に恋心を抱いているのだが六年ぶりにＩＳ学園で再会した一夏に対して素直になれない所謂ツンデレである。

「わ、わかってるよ箒…」

一夏は箒の少しきつめの口調に若干たじろぎながら返事をする。

「嫁よそんなに寝たれば…後で私が添い寝してやる／／／」

輝くような銀髪を腰近くまで長くおろし左目に眼帯を付けた少女が若干照れながら言う。この少女の名前はラウラ・ボーデヴィッヒ。ドイツ代表候補生にしてドイツＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』一通称黒ウサギ隊の隊長である。当初は敬愛する織斑千冬の経歴に泥を塗ったとして一夏の事を嫌悪していたがある事件の際に自分を救ってくれた一夏に惚れ以後一夏を嫁にしようとアプローチをしている。何故婿ではなく嫁なのかそれはまた別の機会に……

「ちょっ、ラウラさん！今の発言聞き捨てなりませんわ！」

その発言を聞いた薄い金髪を縦ロールにした少女がラウラに対して批難を込めた声色で文句を口にする。この少女の名前はセシリア・オルコット。イギリス代表候補生にしてイギリスの名門貴族オルコット家の当主である。入学当初は一夏に対して高圧的かつ蔑視した態度をとっていたがクラス代表決定戦を経て一夏の姿が自分の理想の男の図と重なり、入学当初は一夏に対して高圧的かつ蔑視した態度をとっていたがクラス代表決定戦を経て一夏の姿が自分の理想の男の図と重なり、一夏に対して好意持つようになった。

「まあまあセシリア、そんに怒らないで。」

「そうだよせっし～、落ち着こうよ～。」

クラスの中で一番のしっかり者の鷹月静寂といつものほほんとしているのほほんさん（本名、布仏本音）の二人がセシリアを宥めるがセシリアはまだ不満げだ

「なぁ…、シャルロット」

この光景を見ていた一夏がシャルロットに言葉を掛ける。

「なぁに、一夏？」

「なんでセシリアはあんなに剥きになってるんだ？」

「「「「「「「「「はぁ～～～～～～～」」」」」」」」」

一夏の質問に対してシャルロットはおろか箒、セシリア、ラウラ達を含むクラス全員が溜め息を吐く。

「？？？」

一夏はその光景を不思議そうに見ている。そう、この織斑一夏は自分に向けられる恋愛感情に鈍い。整った容姿に加え人の心の機敏に鋭く境界線のない優しさと天然で学校内外の多くの女性をときめかせ好意を寄せられているのだが恋愛事に関してはなぜか、信じられないくらい、呆れる程鈍い。それ故に学園の女子達からは陰で唐変木・オブ・唐変木というあだ名を付けられている。

そんなやり取りをしている内に生徒達を乗せた四台のバスはＩＳ学園に着いた。

「では、一番前の席の生徒からバスを降りろ」

黒いサマースーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているがけして過肉厚ではないボディライン。狼を思わせる鋭い吊り目をした女性、一年一組の担任織斑千冬の指示が飛ぶ。織斑千冬、第一回『モンド・グロッソ』総合部門及び格闘部門優勝者して織斑一夏の姉である。現役時代は公式戦無敗を誇り世界最強のＩＳ操縦者でありＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』二連覇も確実と言われた。だが第二回『モンド・グロッソ』総合部門決勝戦当日に一夏が謎の組織に誘拐され一夏を助かる為に決勝戦を棄権した。この一件は当時大きな話題となった。その後一夏の監禁場所を提供したドイツ軍に『借り』ができた為一年程ドイツ軍のＩＳ部隊の教官を務めた後、現役を引退しＩＳ学園の教師に赴任した。千冬の指示に従い生徒達がバスを降りていく。現役時代の強さと美貌から学園には彼女のファンや憧れを持つ生徒が多く千冬にはブリュンヒルデという呼び名が付いている。だが本人はこの呼び名を嫌っているのは余談である。そして彼女の指導は厳しい。それを知っている生徒達は順調にバスから降りていく。四台のバスからＩＳ学園一年生がわらわらと降りてきてクラス事に整列した。

「よし全員降りたな。ではこれにて臨海学校を終了する、解散！」

千冬の解散の声を聞き生徒達は自分達の部屋に戻る。そう、ここＩＳ学園は全寮制である。生徒はすべて寮で生活を送る事が義務付けられている。これは将来有望なＩＳ操縦者達を保護する目的もある。一夏も学園の生徒である為例外ではない。一夏は寮の自分の部屋に向かった。

Ｓｉｄｅ一夏

『ふ～、三日ぶりだな～ＩＳ学園。なんだか久しぶりに帰って来た感じがするな。まぁ臨海学校じゃ色々あったからな～』

部屋に着いた俺はベットに座り臨海学校での出来事を思い出していた。今回の臨海学校では二日目…つまり昨日トラブルが起きた。アメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』通称、福音が制御下を離れて暴走しその福音の対処を俺達専用機持ちがする事になった。作戦会議の結果俺と箒が福音を撃墜する事になったんだけど……？

「作戦は失敗……俺は重傷を負って意識を失ったんだよな…」

福音の攻撃を受けて俺は意識を失った。しばらくすると俺は不思議な空間にいた。そこで謎の少女と白い騎士の女性に出会った。そして白い騎士の女性にこう聞かれた。

「力を欲しますか」

力が欲しいかと聞かれた俺は力が欲しいって答えた。不条理や理不尽な力から、この世界で一緒に戦う仲間を守る為の力が欲しいって。そう答えた直後に空が、世界が、眩いほどに輝いて目の前の光景が遠くぼやけていった……。

「ん……ここは…」

目を覚ますと俺は旅館の一室で体中に包帯を巻かれて寝ていた。どうやら福音にやられて意識を失っていたようだ。

「そうだった…俺は福音に……！、そうだ！みんなは！」

俺はは『コア・ネットワーク』を使い福音とみんなが今どこに居るか捜索した。そしてみんなが福音と戦っていると知った。

「こうしちゃいられねぇ！」

俺は布団を飛び出し包帯を取って白式を起動させた。

「！こ…これは！」

俺は驚いたなぜなら白式の姿が変化していたからだ。「『第二形態移行（セカンド・シフト）』第二形態・雪羅…」俺は進化した白式の名を口にした瞬間、さっきの光景を思い出した

「力を欲しますか。」と問い掛けた白い騎士の女性と自分をの手を取った少女を…

「ありがとう…これなら…これならいける！」

俺は感謝の言葉を口にして急いでみんなの所に向かった

『でも…白式だけじゃなくて福音も第二形態移行してたのには驚いたな…』

そう福音も第二形態移行をしておりその圧倒的な性能で一夏が駆け付けた時には箒以外のメンバーは福音によって落とされていた。第二形態移行によって左腕に現れた『多機能武装腕（アームド・アーム）』雪羅で福音を押し始めるもエネルギー切れの危機に陥り紅椿の単一使用能力（ワンオフ・アビリティー）『絢爛舞踏』のエネルギー回復によってかろうじて福音の撃墜に成功した。

Side一夏　Out

「あの時は…ホントにギリギリだったな…」

「なぁーにがギリギリだって？」

考えが声に出ていたのか茶髪をツインテールにした小柄な少女が一夏にその言葉の意味を聞く。この少女の名前は凰鈴音〈ファン・リンイン〉一年二組クラス代表。中国代表候補生にして一夏のもう一人の幼なじみである。愛称は鈴。一夏いわく小学一年から四年の終わりまで一緒に過ごした箒がファースト幼なじみ。箒が転校した直後の小学五年の時に転校してきて中学二年まで一緒に過ごした鈴がセカンド幼なじみとの事。幼なじみにファースト、セカンドと付けるのは世界広しといえど一夏ぐらいだろう。彼女も一夏に好意を寄せているが素直になれない。箒と同じくツンデレである。今まで出番が無かったのは彼女が二組だからである。決して鈴は二組だからいないと言ってはいけない。

「あぁ…鈴ちょっとな…ってなんでここに居るんだよ？！」

一夏は鈴が何故鈴が自分の部屋に居るのか驚きつつも尋ねる。

「なんでって…あんたに用があるから部屋に来たのにノックしても返事がないし…もしかしたらと思ってドア開けたらあんたベットに座ってぼーっとしてたから声をかけたのよ。」

「あぁ…そうだったのかゴメン。ちょっと考え事しててて…で、鈴の用事って何だ？」

一夏は鈴に謝罪し鈴の用事を聞く

「あっそ、用件は千冬さんからの伝言、職員室に反省文の原稿用紙取りにこいって…」

「あ……そうだった……」

鈴の言葉を聞いた一夏は思い出した。二度目の福音へのは一夏達の独自行動。それは重大な命令違反であり福音を撃墜して旅館に戻ってすぐに大広間で全員３０分以上正座させられた。そして学園に帰ったらすぐに反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングが待っている事を…

「あー…こりゃあすぐに職員室に行った方がいいな…」

「そうね早く行った方がいいわよ。あんた以外はもう反省文の原稿用紙受け取ってるし。」

「げっマジかよ!、そりゃ早く行かねぇと。でなきゃ千冬姉に怒られるうえに出席簿で叩かれる　…」

一夏は叩かれた事を思い出したのか頭をさする。

「ははは…あれは痛いわよね…」

一夏の言葉に鈴は苦笑いを浮かべ自分も叩かれた事を思い出し頭に

手を宛てる。

「じゃあ職員室に行ってくるよ。伝言ありがとな鈴」

「まったくよ、お陰で反省文書くの送れたじゃない。今夜デザート奢りなさいよね！」

「わかったよ…じゃあな鈴。」

鈴にデザートを奢る事を承諾し一夏は職員室に向かい歩き出した。

「失礼します。千冬ね…織斑先生はいらっしゃいますか？」

職員室に着いた一夏は挨拶をしてから職員室に入室し千冬が居るかを尋ねる。

「ようやく来たか織斑、こっちだ。」

千冬は書類を整理しながら一夏を呼ぶ。一夏は千冬のいる机に向かう。

「織斑先生、反省文の原稿用紙を受け取りに来ました。」

「あぁ、わかっている。今回の反省文は百枚だ」

そう言って原稿用紙をドサッと取り出す。

「ひゃ、百枚ですか…」

「福音を撃墜したとはいえ二度目の襲撃は重大な命令違反だ、百枚でも少ないくらいだぞ。それとも何か、百枚じゃ物足りないのか？」

そう言って千冬は不敵に微笑む。

「いえ充分です！」

一夏は即効で否定する。百枚でも多いのにこれ以上増やされたらたまったもんじゃないだろう。

「ならさっさと部屋に戻って反省文を書け。期限は明日の昼休みが終わるまでだ。懲罰トレーニングはこちらの都合により明日の放課後だ、覚悟しておけ。」

そう言って原稿用紙を一夏に渡す。

「わ、わかりました。それでは、失礼します。」

一夏をは顔を引き攣らせながら原稿用紙を受け取るが、トレーニングが明日なのを知って若干安堵して職員室を後にした。

Ｓｉｄｅ千冬

「ふぅ…」

一夏が職員室を出た少し後、私は小さく息を吐く。

『まったく……今年はやたらと問題が起きるな』

私は今年起きた出来事を思い出していた。一夏が世界で初めて男でＩＳを動かした事から始まった。一夏は身柄を保護とゆう半ば強制的な理由でにＩＳ学園に入学。入学してからはやたらと騒動や事件が起きている。

「織斑先生、どうかされましたか？」

一人の黒緑眼鏡をかけた女性が私に声をかける。彼女の名前は山田真耶。なんというか『子供が無理をして大人の服を着た』感じがあるが一年一組の副担任で元日本代表候補生だ。実力も量産機でオルコットと凰を二人まとめて倒す程の実力がある。

「あぁ…山田先生。ちょっと考え事をね」

「考え事ですか？」

「あぁ。今年はやたらとトラブルが起きていだろう。その事についてな。」

私は山田先生に何を考えていたのか説明した。

「そうですね…今の所今年の学園行事は全部事件が起きていますもんね…」

「あぁ……」

山田先生の言うとおり今年に入ってから学園行事では全て事件が起きている。クラス対抗戦では謎の無人ＩＳ『ゴーレム』の襲撃、学年別トーナメントではラウラのＩＳにＶＴシステム《ヴァルキリー・トレース・システム》が積まれており暴走、先日の臨海学校では銀の福音が制御下を離れて暴走した。

「まったく、今年はやたらと問題が起きて困る。そして事件の際にはいつも…」

「織斑君が巻き込まれる…ですか？」

「あぁ。はぁ、まったく…あの馬鹿は人の仕事を増やして困るよ…」

私は溜め息をつく。

まったく…心配ばかりかけおって…

「でも織斑先生、織斑君に何かあった時、いつも一番心配しているじゃないですか　。」

「ま、まぁ弟の心配をするのは姉として当然だろう…」

『たった一人の家族なんだ、心配するに決まっているだろう！』

そう織斑千冬は普段一夏に厳しいが実際は一夏の事をとても大切に思っている。まぁ俗に言うブラK……このコメントは削除されました。

「あっ！織斑先生照れてるんですかー？　照れてるんですねー？」

「……」

ぎりりりっ。私は無言のまま山田先生にアイアンクローを食らわせた。

「いたたたたたっ！！」

「山田先生…前にも言ったはずだ。私はからかわれるのは嫌いだと。

「わ、わかりました！わかりましたから離し――あうううっ！」

職員室に山田先生の叫び声が木霊した。

「まったく、山田先生は…」

私は山田先生を解放した後再び考えに浸った。今年のＩＳ学園は異常である。世界初の男のＩＳ操縦者の入学、度重なる専用機持ちの

転入と学校行事の度に起こる事件。その全てに一夏が関わっている事から間違いなく一夏が目的だろう。一夏がＩＳを動かした事により世界は少しずつだが変化しつつある。

『…私は教師として姉としてあいつを守り、正しい方向へと導こう。』

私は自分が今一夏にできる事をすると心に決めた。

Ｓｉｄｅ千冬　Ｅｎｄ

某所。綺麗に清掃された一室で白衣を着た灰色の髪の男性の科学者がキーボードを入力しながら空中投影のディスプレイに浮かび上がったＩＳの各種パラメータを眺めている。

「稼動率１００％…稼動時間は……も十分、各種システム異常無し。よし、後はシステムの調整だけだ」

白衣を着た科学者はうっすらと笑みを浮かべながらそのＩＳをみる。そのＩＳとＩＳを纏った人物を見る。操縦者の身体全体を覆う『全身装甲（フル・スキン）』。その姿はまるで悪魔だ。漆黒で塗り潰された装甲の所々に施された真紅のカラーリング。それはまるで身体にこびりついた

血液のように見える。その悪魔のようなＩＳは見ただけで恐怖さえ感じさせる。

『準備ができたのか？』

そのＩＳを纏った操縦者が声を発する。その声は普通の人間の声ではなく機械を通して変換された中性的なマシンボイスだ。

「あぁ。まずは手始めにここを襲撃してもらう。」

そう言って科学者はキーボードを操作しディスプレイに襲撃場所の情報を浮かべる。

『ドイツ軍のＩＳ部隊シュヴァルツェ・ハーゼ…』

「そうだ。そこの第三世代型ＩＳ『黒い枝（シュヴァルツェア・ツヴァイク）』を含む三機を倒してこい。操縦者や周りの人間は殺しても構わん。」

そう言って科学者は冷酷な笑みを浮かべる。

『……』

「なんだ？何か文句でもあるのか？」

『いや…ない…』

「そうか、なら準備ができ次第襲撃する。それまで部屋に居ろ。」

そう言いながら科学者はＩＳの最終調整に入る。

『わかった…』

悪魔のようなＩＳの操縦者はＩＳを解除した。ＩＳを解除したその場所には黒髪の少年の立っていた。年齢は一夏達と同年代であろうか。少年は顔の左側、左腕、両足の膝から下、に包帯を巻いている。その姿はあまりに痛々しい。長く伸びた後ろ髪は首の後ろで纏めている。前髪は目に掛かっておりそこから鋭く切れ長な右目が見える。先程まで纏っていたＩＳは待機形態の悪魔をあしらったネックレスとなり首に掛かっている。

「では俺は部屋に戻る。準備ができたら呼べ」

そう言って少年は自分の部屋へと戻っていった。

「さてと…さっさと機体の調整を終わらせるとするか、私が製作したこの…『悲劇の復讐者（トラジェディ・アヴェンジャー）』を！」

悲劇の復讐者…この機体の名前が意味する物とは……

「ようやく…この時が来たか…」

部屋に着いた少年は一人呟く。

「もう少しだ…もう少しで俺はあいつに復讐できる…」

復讐…その言葉を口にした途端、少年の表情に憎悪と怒りが現れる。

「あいつの……あいつのせいで俺は！俺は絶対に許さない…俺は絶対に…あいつを殺してやる！」

そして少年は復讐の対象となる人物の名を口にする。

「待っていろ……織斑一夏！」

怒りと憎悪を含んだ声が部屋に響いた

織斑一夏とこの少年。数奇の宿命に翻弄される二人の少年が出会う

時、新たな物語が幕を開け少年と一夏達の宿命が大きく変わる。そしてその瞬間が今、刻一刻と迫っている。

プロローグ　（後書き）

陽炎「どうもはじめまして。この小説の作者の陽炎でございます。」

一夏「どうもはじめまして。ＩＳの主人公織斑一夏だ。」

作者「いやープロローグなのに長かったなー。」

一夏「まったくだ。しかもＩＳとキャラの説明が殆どだし…」

作者「そこはまぁ…大目に見てよ……、それより一夏…お前いきなり殺すて言われてるけどどう思う？」

一夏「どう思うって…まったく思い当たる節がねぇ……」

作者「まぁ彼が一夏を憎む理由は次回から始まる本編で明らかになるからね。」

一夏「そうか…じゃあ最後に、この小説を読んでくれた皆に……」

「「この小説を読んでいただきありがとうございます。これからもこの小説をよろしくお願いします。」」

第一話　復讐者の始動（前書き）

今回から本編が始まります。御意見、感想、よろしくお願いします。

第一話　復讐者の始動

Ｓｉｄｅ一夏

部屋に戻ってきた俺は反省文をいた。

「う～ん……流石に百枚は多いよな……」愚痴った所で反省文の枚数が減るわけではないが愚痴らずにはいられない。

「まぁ……命令違反した俺達が悪いから仕方ないか……」俺は止まりかけてた手を再び動かし反省文を書き上げる。

コン　コン

しばらくの間一心不乱に反省文を書いているとドアをノックする音が聞こえた。

「一夏居る～？そろそろ食堂に行かない？」

ノックの音と共に鈴の声が聞こえる。時計を見るともう六時となっていた。腹も減っていたので俺は食堂に行く事にした。

「あぁ、わかった。今行く。」俺は鈴に返事をして部屋を出た。

Ｓｉｄｅ一夏　Ｅｎｄ

部屋を出た一夏は鈴と共に食堂へと足を進める。

「あっ、一夏、鈴。」

二人は食堂へ向かう途中　でシャルロットとラウラに出会った。

「おっ、シャルにラウラ。二人も食堂に行くのか？」

一夏はシャルロットとラウラの二人に尋ねる。ちなみにシャルとは一夏がシャルロットに付けた呼び名である。

「うむ、そうだ。」

「うん。一夏と鈴も？」

「あぁ、今から夕飯だ。」

「ならば調度いい。一夏、一緒に夕食を取るぞ。」

ここでラウラが自分達も共に食事をすると言う

「いいぜ。飯は大勢で食べた方が美味いし。いいだろ、鈴？」

「それもそうね…わかったわ。じゃっ早く食堂に行くわよ。

鈴はシャル達が加わるのを容認して四人は食堂へ向かい再び歩を進めた。

「あら。奇遇ですわね。みなさん。」

「お前達も今から夕食か。」

四人はその直後箒とセシリアに出会う。これでいつものメンバーが全員揃った。

「おっ、箒、セシリア、調度よかった。夕飯がまだなら一緒に食べないか？」

一夏はナイスタイミングて言わんばかりに箒とセシリアも誘う。

「そ、そうだな…一夏がそこまで言うなら…」

「一夏さんがそうおっしゃるなら…

箒とセシリアは少し照れながら了承する。

「決まりだな。じゃあ行こうぜ。」

こうしていつものメンバーで食堂に向かい食堂に着いた一同は各々食券を購入し頼んだ料理を乗せたトレーを持ちテーブルへと移動した。

席へ着ついた一夏達は軽く談笑しながら夕食をとっていた。ちなみ

にそれぞれの今晩の夕食のメニューは以下の通りである。

一夏　「しょうが焼き定食」
箒「天ぷらうどん（海老天とかき揚げ、後乗せ式）」
セシリア「ローストビーフ・ヨークシャー・プディング添え」
鈴「青椒肉絲（チンジャオロース）定食」
シャル「カルボナーラとサラダ
ラウラ「パンとスープ、そしてヴァイスヴルスト（俗に言うホワイトソーセージ）」

ここＩＳ学園の学食は多国籍・多民族・多宗教というのを考慮してか様々な国のな料理があるしかもかなり美味い。だが作っているのは見た目はごく普通の食堂のおばちゃんである。全くもって不思議な物だ。一応言っておくが、食堂のおばちゃんといってもどっかの忍者のたまごを育成する学園の『お残しは許しまへんで～！』が口癖な最強のおばちゃんではない。

「いやぁ～それにしても、やっぱここの飯は美味いなー」

一夏の言葉を聞いた箒達は頷く。周りの生徒達もうなずいている事からＩＳ学園の食事が本当に美味しい事が伺える。それにしてもこのＩＳ学園の食事風景…もし巨大なしゃもじをもって人の家に突撃して夕食をつまみ食いする人間がこの食堂を見たら、間違いなく狂喜乱舞であろう。

「じゃあ一夏、約束通りデザート奢りなさいよ。」

食事を食べ終わえた鈴が先程の約束を切り出す。

「わかってるよ。で、何がいいんだ。」

「そうねぇ～…じゃあシャーベットをお願い。味はオレンジで。」

「わかった。」

鈴のリクエストを聞いた一夏は席を立ち、食券を買いに向かった。

「鈴。何故お前が一夏にデザートを奢ってもらうのだ？」

今のやり取りを見た箒が鈴に尋ねる。他のメンバーも頷いて答えを待っている。

「あぁその事。一夏に織斑先生からの伝言を伝えた御礼よ。」

鈴は箒の質問に答える。

「そうか…しかし何故織斑先生は鈴に頼んだのだ？」

「「「「さぁ？」」」」

それは二組だから前回のプロローグの時登場が遅れた鈴への作者なりのお詫びという事を五人は知る事はない。

「鈴、持ってきたぞ。」

一夏がシャーベットを乗せたトレーを持って戻ってきた。

「ほら。注文通りオレンジ味のシャーベット」

「ありがと。で、なんで二つも有るの？」

よく見るとトレーにはオレンジのシャーベットが入ったガラスの器が二つ乗っている。

「あぁ…なんか俺も食べたくなってさ。」

「そう」

一夏は鈴にシャーベットが入った器を手渡しつつ説明する。鈴もそれを聞いて理解したようだ。

「んー冷たくて美味い。」

「そうね、ちゃんとオレンジの味がして美味しいし、口の中がさっぱりするわ。」

二人はシャーベットを食べ感想を述べる。清涼感あるオレンジのシャーベットは夕食で肉料理を食べた二人の口をすっきりとさせる。

「そんなに美味しいのですか？」

「あぁ。セシリアも一口どうだ？」

「よ、よろしいのですか　？！で、では…その…食べさせてもらえます？」

セシリアは照れながら食べさせてほしいと頼む。

「わかった。じゃ、あーん」

「あ、む」

セシリアの口の中にシャーベットの冷たさと食感、そしてオレンジの味が広がる。しかし当の本人は一夏に食べさせて貰ったことの嬉しさで味があまりわかっていない。

「どうだ、美味いだろ。」

「え　えぇ。美味しいですわね…」

「「「一夏！！！」」」

この光景を見ていた箒、シャルロット、ラウラが同時に声を発する。

鈴はこの光景を見てシャーベットを味わいつつ何か考えている。

「な、何だよ…？」

「「「私にも食べさせ（（ろ））（てよ）！！！」

セシリアだけずるいと思った三人は自分も食べさせてとお願いする。

「わ　わかった！わかった！」

そう言うと一夏は箒、シャルロット、ラウラの三人に順番でシャーベットを食べさせる。一夏に食べさせて貰った事で三人はセシリア同様喜びに浸っている。

「あ～…今のでシャーベット無くなっちまった…」

四人に食べさせた事で一夏のシャーベットは無くなってしまったようだ。

「一夏、あんた他人にあげて自分が食べてないじゃない。」

「う…うっかりしていた…」

「まったくもう…まだあたしの残ってるから、一口あげるわよ」

「えっ、いいのか鈴？」

「いいわよ。　ほら、あーん」

「あー　んむ…」

「「「「なっ！！！！！」」」」

一夏が鈴に食べさせて貰ったのを見て喜びに浸っていた箒、セシリア、シャルロット、ラウラは固まった。

「うん、やっぱり美味いな。ありがとな、鈴。」

「どう致しまして。」

鈴はそう言うと一夏に食べさせたスプーンでシャーベットを掬い、

「あむっ」

食べた。

「「「「「なっ！！！！！！！」」」」

鈴は一夏がセシリアに食べさせたのを見てある作戦を思いついた。箒達は自分達にも食べさせろと言って一夏もそれを了承して箒達に食べさせて自分はシャーベットをあまり食べれずにシャーベットは無くなるはず。それを予想した鈴は今の一連の作戦を実行する為にシャーベットを残していたのである。

『や、やったわ！せっ成功したわ！いっ一夏と…かかかかっ間接キ

スしちゃったあぁぁぁぁぁぁ！！！』

鈴は作戦に成功し一夏と間接キスできた嬉しさを心の中で叫んだ。

『『『『まっ…負けた……』』』』

箒達は今の光景を見てただ呆然としていた

同時刻、ドイツ国内軍施設。現在ドイツ軍の訓練場上空にて謎のＩＳを纏った一人の襲撃者と一人の女性が戦闘を行っている。

「ば…馬鹿な…」

「我ら『シュヴァルツェ　・ハーゼ』が…」

二人の女性が信じられないとばかりに口にする。それもそのはず『シュヴァルツェ・ハーゼ』はドイツ国内にあるＩＳ十機の内の三機を持っている名実ともにドイツ最強の部隊だ。謎のＩＳが襲撃した瞬間、その三機を纏った隊員が襲撃者を訓練場へと誘導し戦闘を開始した。ドイツ軍は『シュヴァルツェ・ハーゼ』なら謎のＩＳを撃退できると思っていた。だが、先程の二人は手も足もでずにシールドエネルギーを０にされた。残りの一人もエネルギー残量は２０

０を切っている。対する襲撃者のエネルギーは６００以上ある。

『まだやるのか？』

悪魔のような謎のＩＳを纏った襲撃者が機械を通した無機質なマシンボイスで現在戦っている女性に問い掛ける。

「当たり前だ。襲撃者を逃したと会っては『シュヴァルツェ・ハーゼ』の名折れだ……私は貴様を倒す！」

第三世代型ＩＳ『黒い枝（シュヴァルツェア・ツヴァイク）』を纏った女性『シュヴァルツェ・ハーゼ』副隊長、クラリッサ・ハルフォーフが襲撃者に宣言した。

『その信念は尊敬に値する。しかし残念だが…貴女は勝てない！』

襲撃者はクラリッサにそう告げた瞬間クラリッサの視野から消える。

「なっ？！」

『遅い！』

クラリッサが振り向くとそこに襲撃者はいた。襲撃者は超音速移動で一瞬にしてクラリッサに近づいたのだ。

『これで…終わりだ！』

その言葉を発すると同時に左腕の盾の装甲が弾け飛び中からリボルバーと杭が融合した装備が露出する。単純な攻撃力だけなら第二世代型最強と謳われた装備、六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻》

グレー・スケール〉》通称――

「『盾殺し《シールド・ピアース》』……！」

クラリッサは焦りの表情を浮かべその装備の名前を呟いた

ズガンッ！！ズガンッ！！

次の瞬間、パイルバンカー二発がクラリッサの腹部に炸裂しクラリッサの体が大きく傾く。

「ぐはっ……！」

そして二発目が撃ち込まれた直後、黒い枝は強制解除されクラリッサは落下した。

Ｓｉｄｅクラリッサ

「そんな…あんな所から落ちたら…死んでしまう！」

「お姉様ぁ！」

私が落下しそうなを見た二人の隊員は悲観に暮れる。今この場に居るのは襲撃者と私達しかいない。私達のＩＳはエネルギーが尽き動かせない。つまり私を助ける事ができる人物がいないのだ。

『あぁ…私は死ぬのか…隊長……みんな…どうやら私はここまでのようでだ……』

私は現在の状況を理解し目を閉じて覚悟を決めた。

その直後、私は誰かが自分を両腕で受け止めるのを感じた。

『これは…誰かが私を助けてくれたのか？……しかし……一体誰が？』

私はゆっくりと目を開けた

Ｓｉｄｅクラリッサ　Ｅｎｄ

目を開けたクラリッサは驚いた。いやこの光景を見れば誰もが驚くであろう。何故ならクラリッサを助けたのは。

「なぜお前が……」

『……』

クラリッサ達を倒した襲撃者だったのだから。

クラリッサを助けた襲撃者はそのまま地上へと降り立った。

「何故…私を助けた？」

『俺は貴女達の命を奪いに来た訳じゃない。ただそれだけだ……』

クラリッサの問い掛けにそう返答すると襲撃者は上空へと飛び立ち姿を消した。

「おぉ帰って来たか。」

「あぁ」

研究所に戻りＩＳを解除した少年に科学者が言葉をかける。

「一対三で圧倒か。上出来だ」

ディスプレイに映る先程の戦闘映像を観て感想を零す。

「そうか……」

「なんだ…嬉しくないのか？」

「本当に『シュヴァルツェ・ハーゼ』を襲撃する必要があったのか

？」

少年は黒ウサギ部隊への襲撃に疑問を感じたようだ

「あるさ。ドイツ最強の部隊を私が製作したＩＳが圧倒する、これほど愉快な事はない。」

どうやら今回の襲撃は科学者の自己満足のようだ

「まぁ、流血と人が殺される光景がないのが唯一の不満だな…」

どうやらこの科学者相当性根が歪んでいるようだ。

「俺はお前のような歪んだ趣味はない。俺はただ織斑一夏に復讐できればそれでいい。」

「なら、そいつに関係する者をそいつの目の前で傷つけ殺してしまえ。その方がそいつも苦しむぞ。」

科学者は下品た笑みを浮かべる。

「何度も言っているだろう。俺が殺すのは織斑一夏だけだ。それ以外の人間は殺すつもりも、傷つけるつもりもないと。」

少年は自分の意思を口にする。

「ふん、まあいい…今日はもう休め。明日はとうとうお前の望みが叶うぞ」

「あぁ。そうするつもりだ」

そう言って少年ＩＳを科学者に預けた後、自分の部屋へと戻って行った。

少年は自分の部屋に着くと床に横になる。少年の部屋は何もない殺風景な部屋だ。故に寝っころがるぐらいしかやる事がない。

「いよいよ明日か……」

少年は明日、自分の長年の願いが叶うのを感じていた。

「だが…今日の『シュヴァルツェ・ハーゼ』への襲撃…あれは完全に必要なかった…」

少年は今日の襲撃を思いだし複雑な表情を浮かべる。

だが少年は少年は知らない。のちに『シュヴァルツェ・ハーゼ』と意外な形で再開する事を。

翌日、七月九日。この日が一夏と少年の宿命を変える始まりとなる事を誰も知るよしはない。

第一話　復讐者の始動（後書き）

陽炎「どうも皆さん双騎士の裏話の時間です。今回のゲストは」

鈴「はじめまして鈴よ。

陽炎「いや～やっと本編が始まり前半はまさかの鈴祭りとは作者も書いてて驚いてます。」

鈴「そうね。プロローグであたしの登場が遅れたから」

陽炎「鈴のオリジナルイベントを書こうと思ってデザートの下りを考えた
んだけど

鈴「暴走してこうなったと。」

陽炎「はい、その通りです。」

鈴「まぁあたしは一夏と間接キスできたからいいけどね／／」

陽炎「いや箒達もしたけど…」

鈴「少なくても今回はあたしの一人勝ちよ。」

陽炎「しかしこれがこの小説における鈴の最初で最強の見せ場になる事は後書きを見たあなたしか知らない。ごめんなさい嘘です。だから龍咆を閉まってください。」

鈴「まったく……まぁ今回のイベントを書いてくれたから許してあげるわ。」

陽炎「ふぅ、危ない、危ない。さて後半ではついに家のオリ主が動き始めましたが…」

鈴「黒ウサギ部隊を圧倒って…やり過ぎじゃない？」

陽炎「まぁ、あのＩＳチートと言えるからね。」

鈴「で、なんで一夏を憎んでるのよ？」

陽炎「それは…今話すとネタバレになるから言えない。」

鈴「でも落下しそうなクラリッサさんを助けたり、一夏以外の人は傷付けるつもりは無いって意外な一面があるのね。」

陽炎「まぁね。それが家のオリ主だからね。」

鈴「ところであいつって少年、復讐者、襲撃者って表記しかないんだけど。」

陽炎「なんせ名前が無いからねぇ～。こんな表記しかできないんだよ。」

鈴「なんか可哀相ね……でも一夏は殺させやしないわ！絶対に！」

陽炎「それじゃあ最後に読者の皆さん」

「「最後まで読んでいただきありがとうございます。」」

鈴「次回も見なさいよね！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3856ba/

IS〈インフィニット・ストラトス〉宿命を変える奇跡の双騎士

2012年1月11日00時54分発行